

6 3 3 1 - 1 3 6
平成 1 6 年 1 2 月 2 4 日

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除所長

平成 1 6 年度病虫害発生予報第 9 号について
平成 1 6 年度病虫害発生予報第 9 号を発表したので送付します。

平成 1 6 年度病虫害発生予報第 9 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
施設果菜類	コナジラミ類	並	2
冬春キュウリ	べと病	並	2
	うどんこ病	やや少	2
	褐斑病	並	2
	灰色かび病	並	3
	菌核病	やや少	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	斑点病	やや少	3
	うどんこ病	並	3
	菌核病	やや多	3
	アザミウマ類	並	4
	黒枯病（仮称）		4
冬春トマト	葉かび病	やや多	4
	灰色かび病	並	4
	ハモグリバエ類	やや少	4
	トマト黄化葉巻病（TYLCV）		4
冬春イチゴ	うどんこ病	並	5
	アブラムシ類	並	5
	ハダニ類	並	5

1 2 月中旬の冬春キュウリ、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

1 月の気象予報

平年と比べて雨や曇りの日が多く、気温は平年より高い、降水量は平年並か平年より多い、日照時間は平年並か平年より少ないと予想されています。

（ 1 か月予報 鹿児島地方気象台 1 2 月 1 7 日発表 ）

発生予報の根拠および防除対策

施設果菜類

1 コナジラミ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の巡回調査では、冬春キュウリで17ほ場中5ほ場、冬春ピーマンで11ほ場中3ほ場、冬春トマトでは10ほ場中2ほ場で発生が確認されたが、いずれも葉当り0.5頭以下の微発生である。
- 2) 巡回調査ほ場周辺の野外雑草にも寄生がみられる。
- 3) 1月の気温は平年より高いと予想される。

[防除上の注意]

- 1) 高密度になると防除効果が低くなるので発生初期から防除する。
- 2) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 多発時には卵、幼虫、蛹、成虫が混じって生息し1回の防除では効果が低いので、5~7日置きに2~3回、かけむらがないように防除する。ただし、収穫前使用日数が7日以上同一種類の農薬を続けて使用する場合は、7日以上開けて使用する。

冬春キュウリ

1 べと病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率53.0% (平年58.1%)、発病葉率6.8% (平年13.2%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 湿度が高いときには多発しやすく、多発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率17.6% (平年39.4%)、発病葉率1.4% (平年5.3%)は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率29.4% (平年33.7%)、発病葉率2.4% (平年4.2%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 下葉の発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

4 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。
- 2) 発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

5 菌核病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。

6 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の巡回調査では17ほ場中2ほ場で発生を確認したが、いずれのほ場も葉当り虫数0.5頭以下の微発生である。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

冬春ピーマン

1 斑点病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率9.1% (平年36.8%)、発病葉率0.5% (平年3.4%) は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件では発生した場合の被害も大きくなるので、除湿に努める。
- 2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率27.3% (平年45.8%) は平年並、発病葉率0.8% (平年5.3%) は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 本病菌は組織内部に侵入して繁殖し、他の作物のうどんこ病のように白粉をふりかけたようにはならないので、葉裏を中心に観察し早期発見に努める。
- 3) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。

3 菌核病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率18.2% (平年2.0%) は平年よりやや多く、発病株率0.4% (平年0.0%) は平年より多い。

[防除上の注意]

- 1) 地表面の菌核からの胞子の飛散を防ぎ、ハウス内の湿度を下げるためにビニルマルチを行う。

4 アザミウマ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率36.4% (平年48.0%)

10花当り寄生虫数1.3頭(平年2.2頭)は平年並である。

- 2) 12月中旬のヒラズハナアザミウマの発生面積率9.1%(平年41.6%)は平年よりやや少、10花当り寄生虫数0.4頭(平年4.3頭)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) ミナミキイロアザミウマでは10花当りの寄生虫数が1頭から被害果が出始める。多発してからは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底する。

5 黒枯病(仮称)

病害虫発生予察特殊報第1号(平成16年12月3日発表)参照

[防除上の注意]

- 1) 12月中旬の巡回調査ほ場では発生面積36.4%、発病葉率2.8%である。
2) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う
3) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病(やや多)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率10.0%(平年2.7%)よりやや多く、発病葉率1.5%(平年0.1%)は平年より多い。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病(並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 日中の換気、夜間の保温を行い、曇雨天日には加温器の送風を作動させる等、結露防止に努める。
2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 ハモグリバエ類(やや少)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率20.0%(平年47.9%)は平年より少、寄生葉率2.2%(平年6.7%)は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除効果は低いので初期防除を徹底する。

4 トマト黄化葉巻病(TYLCV)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、シルバーリーフコナジラミ(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
2) 施設内外の雑草はシルバーリーフコナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬のイチゴ葉での発生面積率33.3%(平成34.1%)、発病葉率27.7%(平成3.6%)は平成並である。
- 2) イチゴ果実での発生は未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率25.0%(平成17.0%)、寄生株率2.2%(平成3.0%)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。
- 2) 摘芽や摘葉後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

3 ハダニ類 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率33.3%(平成43.9%)は平成並、寄生株率1.8%(平成9.6%)は平成よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。

その他

- 1) 防除上の留意点等については、「病害虫・雑草防除等指導指針」(宮崎県・宮崎県植物防疫協会)を参照するが、農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

- 2) 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平成並の外側20%の度数の入る幅

平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

(平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除所から発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。(従来の防除速報にあたる)

お知らせ(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除所では、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】 病虫害防除所 櫛間 TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499 E-mail : kushima-yoshiyuki @pref.miyazaki.lg.jp
